

地域発 防災ラジオドラマ in つくば 2009

筑波小学校区（筑波山神社周辺） 地震災害編

第1話「筑波山神社周辺の旅館施設への避難」

前提条件の整理（読まない）

地震発生 冬の平日の朝9時

震源地 筑波山直下

マグニチュード 7規模

筑波小学校区の震度 6弱～6強

天候 くもり

課題 災害時の観光客と地域の連携

状況設定（読まない）

筑波小学校区は、つくば市で唯一の山間地帯であり、居住地域に極端な高度差がある他、幹線道路の本数も少ない。また、その特殊な地理的条件から水道や下水等や道路などライフラインも他地域とは違った材料や手法が用いられている。また、筑波山神社や奇岩奇石、ガマの油売り口上など、古くから観光名所で知られており旅館やホテルが多い。近年ではトレッキングや登山が健康ブームで推奨され、さらに、つくばエクスプレスの開業が後押しする形となり、月に二十万人を超す観光客が訪れるようになっていく。そんな中、地震が発生し、急遽ホテルが臨時避難所として機能せざるを得ない状態になる。そして、宿泊客の安否確認や応急処置対応、そしてホテルと宿泊客と地域住民が連携した課題解決が行われていく。

前説（共通ナレーション・毎回放送・ナレーター別録り）

独立行政法人・防災科学技術研究所では、災害時に地域に起きることを住民主体で考えるための方法として、地域の災害シナリオの作成を提案しています。災害シナリオは、行政が作成した各種災害の被害想定やハザードマップを下敷きにして、地域の「より細かい事情」を勘案して、災害時に実際に起きることを時間に沿って具体的に整理して記述したものを指しています。災害シナリオは、地域の関係者が具体的に自分たちの直面する事態を考える仕組みづくりのきっかけとなるものです。シナリオにすることで、事態の展開していくイメージが掴みやすくなり、必要な対応もわかりやすくなります。

地域発防災ラジオドラマつくば、筑波小学校区筑波山神社周辺、地震災害編。このドラマは地域住民の方々がワークショップで議論した内容に基づくフィクションです。

(プロローグ・ナレーター別録り)

主人公は、東京都千代田区在住の主婦長谷川美智子と埼玉県柏市在住の主婦荒木良子。二人は昨今のトレッキング・ブームにあやかり、健康づくりと、平日の安い宿泊料金に惹かれ、標高877mの筑波山の中腹にある観光ホテルに二泊三日の予定で遊びに来ていた。長谷川の自家用車は渋滞に巻かれること無く常磐高速道路のつくば北を出て前日夕方にホテルに到着していた。そして二人は、ゆったり温泉につかり、心づくしの夕食に舌鼓を打ち英気を養った。翌朝和食バイキングを平らげると、二人は意気揚々と、万葉集の時代から信奉され、歴史3000年を誇る古社、筑波山神社へのお参りと、霊峰筑波山頂上である女体山へのトレッキングに向かったのだった・・・。

登場人物

長谷川 旅行者

荒木 旅行者

神社関係者

旅館従業員

住民 (筑波東山地区班長)

旅行者 (ツーリングで筑波山に来ていた)

シーン① 地震発生

シーンの設定

- ・ 市外から来た観光客。筑波山神社参拝中にM7の直下型地震が発生。震度6弱〜6強の揺れが生じる。
- ・ 境内でパニックに陥るが、神社関係者の指示で、とりあえずホテルに戻ることにする。

長谷川「曇りなのに空気が濃いつていうか凜とした感じがさすが万葉の歴史の神社だね。」

荒木「まだ早い時間だし、平日だからあまり人いないね。なんか贅沢な感じ。」

♪ 石段を登る足音。

長谷川「えーと、これが三大將軍徳川家光が寄贈した橋だって。で、このすぐ上が神社。」

荒木「じゃあ、ここの御神水で手を洗っていかなくちやね・・・。」

♪ 遠くから段々と地響きが聞こえてくる。

長谷川「な、なに？あ、あああ、早くその木に・・・。ああ、きゃあああ。」

♪ 石が崩れる音。地震の重低音な地響きがしばらく続く。

荒木「ああ、石段が・・・危なかった。ま、まだ揺れてる？」

長谷川「まだ揺れてる。気をつけて。」

荒木「大丈夫だった？私は大丈夫、驚いて転んだけど。何人か先に上がった人たちは？」

♪ 神社の方で人々の声。大声で叫ぶ声が聞こえてくる。

神社関係者「皆さーん、大丈夫ですか？今の地震で石段や出世稲荷のほうなどあちこち崩れたようです。まだ揺れているので、もっといろんなところが崩れるかもしれません。危険ですから早く境内を出てください。」

♪ 時間の経過を表す短い音楽。

シーン② 筑波山の観光客 9時30分頃

シーンの設定

- ・ 観光客は、急いで泊まった旅館に戻り、フロントで今の状況を尋ねる。他の宿泊客たちも、従業員に情報を求めごったがえしている。
- ・ 旅館従業員は、宿泊客の安否確認、旅館管理者へ連絡を試みる。帰宅したい観光客には、安全のため情報が入るまで旅館に留まるよう指示。

長谷川「思わずしがみついたのがご神木だから助かったけど、崩れた石段の前で揺れていたら危機一髪だったよねえ。」

荒木「ああ、ようやく帰ってこれた。・・・あれ、自動ドア、開かないよ。」

長谷川「ホテル、停電してるんだ・・・。昼間だから気が付かなかったけど。すいませーん、中に入りたいですけど。」

♪ ガラス戸をドンドン叩く音。手動であける音。人々のざわめき。

旅館従業員「すいません、先ほどから停電していますので・・・。」

荒木「二〇一号室の長谷川と荒木です。家族が心配していると思うので連絡とれますか？それから一刻も早くチェックアウトしたいんですけど。」

旅館従業員「地震の後、電話も携帯電話もつながりません。チェックアウトですが、周囲の状況がまだわからないので、危険を避けるために今はお待ちいただいています。」

長谷川「状況がわからないって言うけど、これだけの観光地で、なにか手段はないの？無線とか非常用放送とか衛星電話とか？道路はどうなってるの？責任者は？」

♪ 大きくなるざわめく人々の声

旅館従業員「支配人とは連絡がつきませんができる限りの事はしています。(以下、大声で)みなさんすいません、今から当館のお客様が無事かどうか確認するために、仲居が各部屋をまわりますので、とにかく一度部屋に戻ってください。ご協力をお願いします。新しい何かわかり次第、フロントの前のホワイトボードに記入して、昨晚楽しんでいただいたお囃子の小太鼓を合図としてたたきますので、よろしくお願いします！」

シーン③ 筑波山の旅館 11時00分頃

シーンの設定

- ・ 安否確認の結果、宿泊客の中にケガ人を確認、宿泊者の中から医者や看護婦を確認し対応する。避難してきた住民を施設内の宴会場へ収容する。
- ・ 観光客は、メールや車のラジオを使って情報を集め、自宅は大丈夫だと確認する。

♪ 音楽。太鼓をドンドンたたく音。遠くでだんだん聞こえるざわめく人々の声。

旅館従業員「皆様のご協力で確認が終わりました。行方不明はありませんでしたが、大浴場で、一人転倒して気を失っています。道が通れず麓の病院に運ぶことができません。お客様の中にお医者様か看護師さんがいらっしゃいましたらお力添えください。」

♪ おおー、と歓声上がる。

旅館従業員「あっ！お医者様ですか？ありがとうございます。大浴場の横の部屋です。緊急用の薬箱を持って仲居が二人付いていますので、よろしくご指示ください。」

♪ ガラス戸をドンドン叩く音。

住民「東山地区の班長なんだけど、うちの集落の南側が崩れてきてしまって、また地震が着たら家まで崩れそうで怖いんで、こちらに避難させてもらえませんか？」

旅館従業員「いらしている方で全員ですか？子供さんとお年よりもいらしゃるようなので、畳が良いですね。それでしたら、人数的にも宴会場が一番良いですね・・・。」

荒木「フロント忙しくて話出来ないね。さっき、隣の部屋の人がメールで連絡取れたっていうから、やり方教えてもらって、娘にメールしてみたけど返事来ないの、心配だなあ。」

長谷川「そうだ！なんで今まで気が付かなかったんだろう。停電していてもラジオは聞けるじゃない。車だよ。駐車場に行つて車のラジオを聴いてみようよ。なにか判るよ。」

♪ ガラス戸を開ける音・車のドアを開け、イグニッションをまわす音。ラジオの音。

長谷川「ほら、やっぱりラジオは聴けるよ。ここは標高が400m位あるからすごく良い音で聴けるよ。マグニチュード7？茨城県南部が震度6強だって。東京は震度3か、私の家のある千代田区とかあんたの家のある柏あたりも、娘さんの川崎も震度3程度だから大丈夫だ。」

シーン④ 要援護者の支援 12時00分ごろ

シーンの設定

- ・ 要援護者に非常食を供給。要援護者に二次災害を説明し、避難所へ誘導。
- ・ トランシーバー、バイクの活用。

♪ 時間経過を表す音楽。徐々に人々の声。

住民「実は地域の中で、何人かここに避難してこなかった人がいんだよ。自分の家は大丈夫だからつつつてよ。本当は寝たきりの年寄りがいるから出て来れねーんだよな。」

旅館従業員「そろそろケールカー横の配水場の水が無くなって断水すると思います。ホテルは受水槽があるので少し持ちますが、各部屋のトイレは使用禁止にして、大浴場更衣室のトイレで、お風呂から水を汲んできて使ってくださいます。」

住民「このすぐ西側の松見高校が避難所になっているから、そこに水とか食べ物が届いてんじやねーかと思うんだよ。なんか情報もあると思うし。いつまでもホテルのをもらってばっかしいらんねーし、もらってきて、上に残ってる人らに届けてくるしかあんめえなあ。」

旅館従業員「(大きな声で)皆さん。これから避難所に行って援助物資をもらってきます。どなたかお手伝いいただけませんか。さらに、もらってきた後に、こちらの地域の方で、理由があつて家に残ってる人達に、物資を運んで欲しいんですが・・・。」

住民「んで、上に行ったら『また地震あつたら危ないし、水も食べ物も無いんだから、ここか松美高校に行こうっ』て言つて、おんぶしてでも連れてきてくれねーかな？」

旅行者「もしよければ、私たちも手伝いますよ。3人ともオートバイで来ていますので。」

住民「本当に？そしたら先にバイクで松美高校に行つて、避難所出来たら、その人らに援助物資分けてもらえるか確認してもらつていいですか？」

旅行者「了解です。向こうの状況がわかり次第、このトランシーバーで伝えますね。ところで、ここにある新聞のラジオ欄に『ラヂオつくば』ってあるんですが、つくば市にFMのラヂオ放送局があるんですか？ここで地域の情報聞けるんじゃないですかね？」

旅館従業員「そうか！そういえば、地元でラヂオ局が出来たって、前に誰か話をしてました。すぐに駐車場でラヂオを確認している方々に話します！」

(エピソード・ナレーター別録り)

地震が発生してから3時間たちましたが、この時点では、まだまだ帰宅できる目処は立っていません。それどころか道路は通れるのか、本当に避難所に救援物資は届いているのか、他のホテルや麓の集落はどうなっているのか、市役所や消防や警察はどうしているのか、判っていません。最後にコミュニティFMの存在に気づいた事、そして直接避難所に向かう事で、動きが大きく変わってくるでしょう。人は情報をトリガー(きっかけ)にして動きます。緊急時にはいかに早く正確に情報を収集し、それをわかりやすい形に加工して提供するためのアイデアや工夫や努力が必要になります。第2話では、筑波山の麓の地区での被災対応の様子を描きます。同じ地域でも地理的条件が違っていると全く違ったドラマが展開されますので、是非お聞きください。

(エンディング・ナレーター別録り)

このドラマは、住民をはじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して、災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーションとして、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から、意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

本ドラマに関するご意見、ご感想などを、独立行政法人防災科学技術研究所、またはラヂオつくばまでお寄せください。

このドラマは住民はじめ行政など地域のさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。

● このドラマは地域住民を主体とするさまざまな関係者が協力して災害時に想定される事態や対応について話し合い創作されたフィクションです。ドラマのシナリオづくりの過程では、地域社会の実態を調べ、かつ、行政の防災計画や防災体制、被害想定、ハザードマップ、マニュアルなどの公式な情報を参考にしていますが、社会的なシミュレーション（模擬演習）として、また、今後の改善の視点を盛り込むなどの理由から意図的に事実と異なる設定をしている場合があります。ドラマの背景となっている筑波小学校区に関して若干の補足説明を以下にまとめます。

● 筑波小学校区の特徴として、公設避難所がカバーするエリアが非常に広く、災害時に高齢者や要援護者が自力で移動するには避難所までの距離が遠いという問題があります。ドラマに登場する「働く婦人の家」は沼田地区に存在し、市が管理している施設ですが、一般的な避難所には指定されていません。ここでは遠い小学校に行くよりも、地域になじみのある施設を選択するかどうかという問題があるのかということを考えるために登場させています。施設は講習室、軽運動室、調理実習室、相談室などがあり、小学校よりも新しく建てられた建物です。

● ドラマの登場人物に区長さんと常会長さんが登場します。区長さんはこのドラマの舞台となった筑波小学校区に所属する4つの地区のそれぞれを代表する住民組織の代表ですが、常会長さんは区長さんの下で住民への連絡や通達を務める班長さんを束ねる役として存在したり、地区によっては置かないところもあるようです。いわゆる住民主体の地域組織には町内会、自治会、区会などのさまざまな名称がありますが、このドラマでは筑波小学校区に現在存在している地域集団の役割をそのまま生かした形でストーリーを作りました。またいばらきレスキューサポートバイク（IRB：田辺和夫代表）は実在の団体で、国内で発生したさまざまな災害現場でボランティア活動を実施しています。なお、レスキューサポートバイクは全国的なネットワークで活動が広がっています。